

目 次

序

監修にあたって

横須賀市長

横 山 和 夫

監修者

山 中 裕

〔横須賀市域の自然〕

第一編 自然環境

第一章 地質のあらまし 2

第二章 三浦半島の生い立ち 4

第一節 嶺岡層群の時代 (五〇〇万〜四〇〇万年前) 4

第二節 葉山層群の時代 (二五〇〇万〜九〇〇万年前) 5

第三節	三浦層群の時代 (六〇〇万〜三〇〇万年前)	5
第四節	上総層群の時代 (二〇〇万〜七〇万年前)	6
第五節	成田層群の時代 (二五万〜七万年前)	6
第六節	関東ローム層の時代 (七万〜一萬年前)	7
第七節	縄文時代 (二万〜二〇〇〇年前)	8
第八節	現世	8
第三章 応用地質と災害		
第一節	採石・石材	9
第二節	地下水	9
第三節	第四紀の地殻変動と地震	10
第四節	地すべり	11
第五節	崖崩れ	11
第六節	地盤沈下	12
第七節	土壌	12
第四章 地 形		
第一節	横須賀にみられる主な地形	19

第二節	地形の特色と地殻変動	22
第三節	三浦半島をとりまく海底地形	25
第五章	比較的温和な気候	27
第一節	暖国型の気候	27
一	年平均気温	27
二	平均気温の年変化	27
三	日最高気温と日最低気温	28
第二節	比較的に少ない降水量	29
一	年降水量	29
二	降水の年変化	29
第三節	海岸部に強い風と海陸風	29
一	風の年変化	29
二	海風と陸風	30
三	偏形樹の分布からみた横須賀の風	32
第六章	陸	33
	水	33

第二編 動植物

第一章 三浦半島の植物

第一節 植物相の概観

..... 36

第二節 植生

..... 38

第三節 三浦半島の森

..... 38

第四節 植物の四季

..... 40

第五節 海岸の植物

..... 43

第六節 水辺の植物

..... 45

第七節 帰化植物

..... 47

第八節 三浦半島沿岸の海藻

..... 48

第九節 キノコ

..... 49

第二章 三浦半島の陸上動物

..... 51

第一節 陸上動物を支える環境

..... 51

第二節 哺乳類

..... 51

第三節	鳥類	54
第四節	両生類・爬虫類	56
第五節	淡水魚類	59
第三章	三浦半島の海洋生物	65
第一節	暖海の三浦半島	65
第二節	豊富な生物相	66
第三節	東京湾の魚と漁	70
第四節	相模湾の魚と漁	73
第四章	三浦半島の昆虫	76
第一節	昆虫のすむ自然的背景	76
第二節	黒潮の影響を受けた昆虫	76
第三節	二次林の昆虫	80
第四節	水生昆虫	80
第五節	都市河川の再生	82
第六節	分布上注目される昆虫	82
第七節	減った昆虫・増えた昆虫	83

〔横須賀市域の歴史〕

第一編 採集の時代

〔水稻耕作時代以前の横須賀〕

第一章 先土器時代の横須賀……………86

第一節 更新世の自然環境……………86

一 赤土のなかの文化……………86

二 絶滅した大型脊椎動物……………86

第二節 先土器時代の遺跡と遺物……………87

一 先土器時代の遺跡……………87

二 一本松C遺跡出土の遺物……………89

第二章 縄文時代とその環境……………90

〔後氷期の環境変化と新たな文化〕……………90

第一節 縄文文化の成立……………90

一	縄文時代の開始	90
二	縄文時代の基本的視点	90
第二節	縄文人の生活の舞台	92
一	後氷期の環境変化	92
二	縄文人の生活の場	93
第三章	成立期の縄文文化	96
一	最古の貝塚群の形成	96
一	夏島貝塚と平坂東貝塚	96
二	生産の対象とその様相	97
二	周辺地域との交流	99
一	平坂貝塚と生活の場の変化	99
二	黒曜石の利用と他地域との交流	100
第四章	縄文文化の発展とその階程	103
一	内湾性漁撈文化の展開	103
二	古久里浜湾の形成と文化の上昇	103
一	茅山貝塚と吉井貝塚	103

二 豊富な漁撈具とその活動	104
第二節 定型的集落の成立と展開	105
一 前期の集落とその変化	105
二 伝福寺裏遺跡の調査とその成果	107
三 遺跡数の増加と安定した中期の集落	109
第五章 成熟する縄文文化とその終焉	111
く採集社会の成熟く	111
第一節 生活の場の変化と貝塚群	111
一 成熟期の集落	111
二 古久里浜湾の縮小と生活の場の変容	112
第二節 縄文時代の終焉	114
く減少する遺跡と立地の変化く	114
第二編 農耕の開始と発展	116
第一章 農耕文化の始まり	116
第一節 縄文文化と弥生文化	116

第一章	高塚墳の出現	130
第一節	高塚墳の分布と時期	132
第三編	古代の横須賀	
第二章	農耕文化の発達	124
第一節	弥生人の生活	124
一	上ノ台遺跡と弥生集落	124
二	海蝕洞穴と弥生人	125
第二節	農耕の発展と社会の変化	127
一	住吉遺跡と腰巻遺跡	127
二	弥生社会の変化	128
第二節	弥生文化の波及	119
一	三浦半島の弥生遺跡	119
二	古久里浜湾周辺の弥生遺跡	121
一	縄文土器と弥生土器	116
二	弥生文化と道具	117

第二節	蓼原古墳	133
第三節	前方後円墳と古久里浜湾	135
第二章	横穴の消長	138
第一節	横穴の時期と分布	138
第二節	横穴の副葬品	139
第三章	律令制度の浸透と人々の暮らし	142
第一節	環境と生活の場	142
第二節	ムラの生活	142
第三節	古代の住まい	145
第四節	ムラ人たちの生業と道具	146
一	土師器と須恵器	148
二	人々の生活と御浦郡	151
第四章	武士団の発生と三浦一族	152
第一節	坂東へ下る源氏と平氏	152
一	崩れる律令制度	152
二	武士団の成立	153

第二章	相模のつわもの……………	154
一	前九年・後三年の役……………	154
二	聞こえたるつわもの……………	155
第三章	源氏と三浦一族……………	156
一	義朝と義明……………	156
二	三浦一族を頼む源氏……………	157
三	武士の館……………	158
第四編	中世の横須賀……………	
	（中世武士団と村々）……………	
第一章	衣笠合戦と鎌倉幕府の成立……………	162
一節	頼朝起つ……………	162
一	伊豆の流人源頼朝……………	162
二	石橋山の合戦……………	162
三	衣笠合戦の意義……………	164
二節	鎌倉幕府と北条・三浦氏……………	165

一	草創の幕府……………	165
二	両雄の争い……………	166
三	宝治の合戦……………	168
四	北条氏と佐原一族……………	169
第二章	鎌倉の盛衰と三浦一族の消長……………	171
第一節	建武の新政と三浦半島……………	171
一	鎌倉幕府滅亡……………	171
二	南北朝期の相模守護……………	172
第二節	鎌倉公方と三浦氏……………	173
一	応永ノ享徳の乱……………	173
二	東下りの公家・僧侶……………	175
三	宗瑞と道寸の争い……………	176
第三章	三浦氏と仏教文化……………	178
第一節	平安時代の信仰……………	178
一	三浦氏の寺院と平安仏……………	178
二	衣笠坂の台経塚……………	180
第二節	中世の仏教文化……………	181

第四章 後北条氏・土豪・村人

第一節 後北条氏と二浦半島

- 一 浄楽寺と満願寺……………181
- 二 満昌寺と御霊明神社……………184
- 三 清雲寺と曹源寺……………185
- 四 各宗派の発展と造仏……………187

第二節 中世の村を歩く

- 一 玉縄城と三崎城代……………189
 - 二 「海の土豪」……………190
 - 三 村に住む武士たち……………191
- ### 第二節 中世の村を歩く……………194
- 一 法華堂の所領の村々……………194
 - 二 須軽谷村の中世……………195
 - 三 近づく近世……………197

第五編 近世の横須賀

く栄える浦賀湊と村の暮らしく

第一章 新しい支配者徳川氏と農民	200
第一節 徳川家康の江戸入城	200
一 関東の大名徳川氏	200
二 直轄地と船手組の旗本	201
三 走水奉行と三崎奉行	202
四 「元禄の地方直し」と旗本	204
第二節 検地Ⅱ村の成り立ちと農民	205
一 石高の世の中	205
二 検地と石高	206
三 村高と年貢の関係	208
四 新田を開く人々	209
第二章 浦賀番所と湊のにぎわい	211
第一節 経済の発達と海運	211
一 海運と陸運	211
二 浦賀奉行を新設	212
三 浦賀の町役人	213
第二節 湊の経済・社会・文化	215
一 商人と番所役人	215

二 往来する人と物資……………	216
三 町方と村方……………	218
第三章 江戸時代の庶民生活……………	220
第一節 農民の暮らしと農業……………	220
一 『浜浅葉日記』にみる農民の姿……………	220
二 農 事 暦……………	223
三 肥 料……………	223
四 ふ ず き 鋤……………	226
第二節 海辺の暮らしと漁業……………	227
一 江戸の台所として……………	227
二 魚種と漁法……………	231
三 特筆される諸漁業……………	235
第三節 庶民の信仰……………	238
一 農村の講組……………	238
二 海に生きた人々とその信仰……………	241
三 寺社の発展と造仏……………	244
第四章 異国船来航と沿岸防備……………	248

第一節 「江戸の咽喉に御座候」	248
一 日本の鎖国	248
二 老中松平定信の海岸検分	249
第二節 三浦半島を警備する大名たち	250
一 川越松平氏の憂うつ	250
二 会津松平氏と家臣たち	252
三 村人と御台場警備	253
第三節 ペリー来航す	254
一 アメリカの意図	254
二 親書の交換風景	256
三 庶民の見た開国	258
第六編 明治時代の横須賀市	
第一章 明治維新と横須賀製鉄所	262
第一節 製鉄所の創設	262
一 洋式艦船の建造と購入	262

	世界の動きのなかの日本／262	大型船建造の解禁／263	大型船の建造と購入／263
二	艦船の修理と造船所設置……………		
	洋式艦船の運行操練／265	艦船修理の要求／265	江戸湾沿岸に造船所設立の企画／266
三	横須賀製鉄所建設とフランス……………		
	フランス公使ロッシュの着任／267	フランス側の誠意と技術／268	横須賀製鉄所に決定／268
	製鉄所創設とフランス側との約定／269	横須賀製鉄所設立原案／270	
四	工事の着手とその後の進展……………		
	横須賀製鉄所の鋳入式／272	フランス人による建設着工／272	
	製鉄所設立を推進した人々／274		
第二節	明治政府と造船所……………		
一	明治政府の接收……………		
	江戸幕府の崩壊／276	製鉄所の接收／276	借財の返済／278
二	海軍拡張と造船所の伸展……………		
	製鉄所から造船所へ／278	船渠と工場／279	造船所の活況／279
	造船所に働く人々／280	製鉄所の技術教育／281	日本の造船所へ／281
三	灯台の建設……………		
	洋式灯台をつくる／282	浮標の設置／283	
第二章	軍都横須賀の誕生……………		
第一節	横須賀町への発展……………		

一	横須賀村から横須賀町へ	284
	新政府の施策と三浦半島	284
	戸籍法の発布	284
	区画改正	286
	大小区制の施行	286
	郡区町村編制法の実施	288
	町村連合体制の実施	289
	町村会の発足	290
二	埋立てによる町域の拡大	290
	埋立てと町の中心地	290
三	町村制施行と横須賀町の確立	292
	町村制の実施	292
	警察署と裁判所	293
	横須賀町の繁栄	294
第二節	陸海軍施設の設置と拡充	296
一	海軍関係施設の拡充	296
	横須賀鎮守府	296
	水雷学校	298
	砲術学校	299
	機関学校	300
	海軍工機学校	301
	水兵の養成(海兵団)	302
	横須賀海軍病院	302
二	陸軍関係施設の設置と進展	303
	東京湾防備と砲台建設	303
	要塞砲兵の教育	305
第三節	横須賀の発展	305
一	交通の整備	305
	栄えた浦賀道	305
	浦賀道をたどる	305
	飯県道から県道へ	307
	坂とトンネル	308
	人力車と馬車	309
	横須賀線の開通	309
	水上交通	311
	郵便と電信の発達	313
二	新しい教育の確立	313

	学制施行前の学校 / 313	学制の施行 / 314	教育内容と方法 / 316
	教育令施行の前後 / 316	技術教育 / 317	
第三章 軍備拡張と海軍工廠			
第一節 日清戦争と軍備増強			
一	海軍予算と日清両国の対立	海軍予算問題 / 319	日本と清国の対立 / 319
二	横須賀鎮守府造船部の活況	造船所から鎮守府造船部へ / 320	日清戦争と造船部 / 320
		三国干渉と軍備拡張 / 321	
三	陸軍関係施設の整備	東京湾要塞司令部の設置 / 322	横須賀軍港防禦計画 / 322
四	町の動き	町の広がり結びつき / 323	町の施設 / 324
第二節 日露戦争と軍備拡張下の町勢			
一	日清戦争後の海軍	海軍拡張計画 / 325	外国への発注船 / 325
二	陸軍の情勢	東京湾守備と陸軍 / 327	
三	町の整備と町民の生活		

	日露戦争と町民の生活／327	産業界の動き／328
	公共施設の充実／329	町政の動き／329
		ペリー記念碑／329
第三節	横須賀海軍工廠	330
一	海軍工廠への変遷	330
二	横須賀海軍工廠の誕生	333
三	横須賀海軍工廠建造の艦艇	335
四	海軍工廠と福利救済組織	351
	鉄工組合／351	横須賀職工共済会／351
		横廠工友会／352
第四章	近代都市への出発	354
第一節	市街地の発展と教育	354
一	戸数の増加と市街地	354
	増える戸数／354	市街地の形成／354
二	教育の充実	356
	小学校の増設／357	中学校の設立／358
		実業補習学校と幼稚園／359
第二節	市制施行	360
一	市制施行までの歩み	360
	市制施行への気運／360	市制施行の理由書／360
		市制施行までの曲折／362
	新しい横須賀町／363	

第七編 大正時代の横須賀市

第一章 海軍力の充実と市民の生活

第一節 海軍力の充実

一 海軍航空隊の発足

384

384

384

二 横須賀市の発足と市の動き

363

市制の施行 / 363 当時の市の状況 / 365

三 市政のはじまり

369

市政の基礎づくり / 369 市政混乱の兆し / 369 初代の助役と収入役 / 370

第一期市会議員 / 370 歴代の市会議長と副議長 / 371 市参事会 / 371

第三節 明治における文芸・芸能の発展

372

一 明治期の郷土史料

372

江戸期の郷土研究 / 372 明治期の郷土研究 / 373

二 横須賀を描く文芸作品

375

明治の小説 / 375 明治の紀行文 / 377 明治の俳壇 / 378

三 軍楽隊と大衆の歌

380

海軍軍楽隊 / 380 一般大衆の歌 / 381

海軍と航空機／384	海軍航空隊の創設／385
二 第一次世界大戦と海軍力の増大……………	385
八・八艦隊構想と世界大戦／385	
三 海軍工廠の活況……………	387
世界大戦と海軍工廠／387	
第二節 市民生活の進展……………	389
一 大正期の横須賀の地名……………	389
二 給水量の増大と施設の拡充……………	390
人口増加と水道設備／390	
三 衛生面の拡充……………	392
伝染病とし尿の処理／392	
四 諸施策の実施……………	392
米価高騰と世情不安／392	
民生安定の諸施策／393	
五 道路網の整備と交通……………	394
本市の道路事情と新道路法／394	
バス交通／395	
関東大震災と道路改正／395	
六 開港五〇年祝賀……………	396
開港五〇年・工廠創立五〇年／396	
七 変わる社会と市民の生活……………	398
人口増が示すもの／398	
文化面の変化／399	
市民の経済生活／400	

第二章 関東大震災と稲楠土地交換	401
第一節 関東大震災と市民生活	401
一 震災による被害	401
関東大震災／401	
崖崩れによる大被害／402	
火災による被害と市民の様子／403	
人的被害／404	
建物等の物的被害／408	
産業面の被害／408	
二 震災後の市民生活と復旧工事	408
苦難の市民生活／408	
各方面の復旧への取組み／409	
復興会の設立／411	
計画の実施／412	
第二節 海軍助成金と稲楠土地交換問題	413
一 海軍助成金問題	413
海軍助成金問題の起り／413	
助成金の配分／416	
助成金配分と市会／417	
二 稲楠土地交換問題	420
土地交換の起り／420	
土地交換交渉の経過／420	
交渉事業の終結／425	
三 稲楠土地交換と市の財政	426
土地交換事業と借入金／426	
土地交換事業の残したもの／426	
第三章 海軍軍備縮小と横須賀市	427
第一節 第一次軍縮と海軍工廠	427
一 ワシントン会議	427

国家財政と軍縮／427	
二 軍縮条約の影響……………	429
軍縮条約の実施／429	
工廠の人員整理と工友会／430	
第二節 大正末期の経済状況	
(戦後不況と市の経済)	
軍縮と市経済／431	431
第三節 歴代市長の施政……………	436
一 市勢の拡充―田辺市長の時代―……………	436
二 物価高騰との戦い―第一次奥宮市長の時代―……………	436
三 震災とその復興……………	437
第二次奥宮市長の時代／437	
石渡坦豊市長の時代／438	
四 歴代の助役と収入役……………	439
歴代助役／439	
歴代収入役／439	
第四節 市会議員と議長・副議長……………	440
一 各期の市会議員……………	440
第二期市会議員／440	
第三期市会議員／440	
第四期市会議員／440	
第五期市会議員／441	
二 歴代の市会議員と副議長……………	442
歴代議長／442	
歴代副議長／442	

第四章 大正期の教育と文化	443
第一節 大正期の教育	443
一 学校教育の充実	443
教育の進歩 / 443	
人口増加と学校教育 / 443	
新しい教育 / 444	
体育・学芸行事 / 445	
学校総合視察 / 446	
二 中等教育の発展	446
中等教育の充実 / 446	
特殊教育と各種学校 / 447	
青年訓練所の発足 / 448	
第二節 横須賀文化の動向	448
文化の芽生え	448
自然科学分野 / 448	
人文科学分野 / 449	
第三節 文学にあらわれた横須賀	449
一 横須賀、三浦の文学的風土	449
二 若山 牧水	450
牧水の生いたちと文学 / 450	
北下浦の生活 / 452	
北下浦周辺と旅 / 454	
三 芥川龍之介	456
芥川と横須賀 / 456	
芥川作品と横須賀 / 456	
四 その他の文学者	458
散文 / 458	
短歌・詩 / 461	
俳句 / 463	
第四節 芸能界の推移	464

舞踊 / 464 美術・音楽 / 464 華・茶道 / 464

第八編 昭和時代の横須賀市 I

第一章 一五年戦争と軍都横須賀の拡大 466

第一節 第二次軍縮

↳第二次軍縮と海軍労働組合連盟 466

第二次軍縮 / 466 海軍労働組合連盟 / 467

第二節 満州事変と市財政 468

一 満州事変と上海事変 468

横須賀海軍工廠の人員整理 / 468 戦時体制下の市民の動き / 468 海軍航空廠 / 469

二 本市の財政難 470

不況による本市財政の引き締め / 470

第三節 国際連盟脱退と軍事力の増強 471

一 国際連盟及び軍縮会議脱退と海軍工廠 471

国際連盟脱退 / 471 海軍工廠の動静 / 471

二 日中戦争と軍需労務要員 472

軍需労務要員の激増 / 472

第四節 第一・二次の市域の拡大	472
一 大横須賀建設準備委員会の結成	472
町村合併の促進	472
二 衣笠村の合併	473
合併条件の検討	473
合併の成立	474
三 田浦町との合併	475
合併条件の審議	475
合併の成立	477
四 久里浜村の合併	477
合併への動き	477
合併条件の検討	478
第五節 戦時体制へ向かう横須賀の産業	480
一 農 業	480
市域拡張と農業行政	480
戦時体制下の食糧増産	480
米・麦の生産状況	482
野菜類の生産状況	483
二 水 産 業	484
好漁場をもつ三浦半島	484
漁業者と漁船の推移	484
漁業制度の変遷	486
当時の漁業形態	486
三 工 業	488
海軍工廠への期待	488
各工場の生産概況	488
日中戦争以降の海軍工廠	489
四 商 業	490
昭和初期の店舗と営業者	490
営業者総数の推移	492
配給制度下の商業	492

商店の強制疎開／493

第六節 太平洋戦争突入と第三次市域の拡大

一 太平洋戦争突入と横須賀市……………494

臨戦下の横須賀市／494

二 市是の確立……………495

大軍港都市確立の方策／495

三 第三次市域の拡大（六か町村の合併）……………496

大軍港都市建設構想／496

四 昭和初期の横須賀の地名……………498

第二章 太平洋戦争中の横須賀……………501

第一節 戦時中の市民生活……………501

一 宣戦大詔の発布……………501

戦時体制の強化／501

二 町内会活動……………501

市内の町内会／501 隣組／503

三 物資の統制と配給……………503

配給制度の確立／503 食糧の統制配給／503 日用品の配給／504

四 資源の回収と開拓……………504

金属その他の供出／504 国民の体力増強運動／505

	五	貯蓄の励行……………	506
		国民貯金／506	
	六	戦時中の市民の暮らし……………	506
		防空ずきん／506	
		もんぺ／507	
		国民服とゲートル／507	
		衣料切符／507	
		買出し／507	
		代用品／509	
		灯火管制／509	
		千人針／509	
		防空壕／510	
		防空訓練と横須賀空襲／511	
	第二節	戦時体制下の市政……………	512
	一	市政の態勢強化……………	512
		市政の態勢／512	
		戦時体制の強化と市民生活／512	
	二	建物疎開……………	513
	第三節	戦時中の交通対策……………	518
	一	横須賀線の延長……………	518
		久里浜延長線の開通／518	
		横須賀トンネルの工事／518	
	二	京浜急行・久里浜線の開通……………	519
		湘南電鉄開通／519	
		久里浜線の開設／520	
	第四節	戦時中の海軍工廠と海・陸軍施設……………	522
	一	終戦前の海軍工廠……………	522
		昭和の海軍工廠／522	
	二	海・陸軍施設の拡張……………	522

終戦前の海軍施設	522	終戦時の海軍施設	523
終戦前の陸軍施設	530	終戦時の陸軍施設	530
海軍の航空施設	523		
第五節 終戦と市民	534		
第三章 市の機関と市民の自治組織	535		
第一節 歴代市長の施政	535		
一 財政の窮乏とその対策	535		
岡田市長の時代	535	小栗市長の時代	535
高橋市長の時代	536		
二 財政の立直しと地域の拡張	536		
大井市長の時代	536	三上市長の時代	537
小泉市長の時代	538		
鈴木斎治郎市長の時代	538		
三 戦時体制下の市政	539		
久野市長の時代	539	岡本市長の時代	540
第一次梅津市長の時代	541		
四 歴代の助役と収入役	541		
歴代助役	541	歴代収入役	542
第二節 市会議員と議長・副議長	542		
一 各期の市会議員	542		
第六期市会議員	542	第七期市会議員	542
第九期市会議員	543	第八期市会議員	543
二 歴代の市会議長と副議長	544		

歴代議長／544 歴代副議長／544

第三節 市民自治と町内会……………544

一 部会の歩み……………544

二 町内会の活動……………545

第四章 戦時下の教育と文化……………547

第一節 戦時期の教育……………547

一 昭和初期の教育……………547

小学校教育の改善／547 中等教育の発展／547 青年学校の創立／548

二 戦時教育と国民学校……………549

戦時教育への道／549 国民学校の設置／550 戦時下の中等学校／550

三 決戦体制下の学童疎開……………550

縁故・集団疎開／550

四 生徒の勤労働員……………556

生徒の勤労作業／556 生徒動員／557

第二節 戦時下の文学に描かれた横須賀……………559

一 島崎藤村……………559

『夜明け前』／559 横須賀と木曾谷／559

二 その他の文学者と作品……………561

宇野浩二／561 牧野信一／562 与謝野鉄幹、晶子／562 土屋文明／563
人物伝その他／563

第九編 昭和時代の横須賀市Ⅱ

第一章 終戦と横須賀市 …………… 566

第一節 軍港から進駐軍基地へ …………… 566

一 連合国軍の横須賀進駐…………… 566

二 占領の進行とその対応…………… 567

三 旧軍関係の組織・施設の解体と引渡し…………… 567

四 人口の激減…………… 568

第二節 横須賀市更生対策要項 …………… 570

一 軍都から平和産業都市へ…………… 570

新しき横須賀へ／570

二 横須賀市更生対策要項の策定…………… 570

新生横須賀の都市像／570

第二章 横須賀の再生を目指して…………… 572

〈平和産業港湾都市の建設〉…………… 572

第一節 初期の港湾修築・整備事業……………	572
一 久里浜港の修築事業……………	572
大型遠洋漁船基地としての期待／	572
二 長浦港の修築事業……………	575
「緊急食糧受入港」としての出発／	575
三 その他の港湾の整備事業……………	576
横須賀本港・小川港・安浦港・浦賀港／	576
第二節 平和産業建設への出発……………	579
一 転換企業と進出企業……………	579
転換企業の誘致／	579
進出企業の状態／	579
二 追浜地区の変遷……………	580
第三節 旧軍港市転換法の成立……………	583
一 制定の経緯……………	583
「旧軍港市転換促進委員会」の結成／	583
市民大会の成功／	584
住民投票で圧倒的な賛成／	584
二 軍転法の内容……………	585
三 軍転法の現実的効果……………	587
第三章 市政機関の活動と市民……………	589

第一節 歴代市長の施政……………	589
一 軍港都市から平和産業都市への転換	
― 第一次梅津市長の時代―……………	589
市政転換の課題／589	
更生対策要項の策定と実施／589	
二 新しい地方自治体への発足	
― 太田市長の時代―……………	590
公選初代市長／590	
太田市政の課題／590	
町界町名地番の整理事業に着手／591	
三 旧軍港市転換法の制定	
― 石渡市長の時代―……………	591
石渡市政の課題／592	
旧軍港市転換法の成立／592	
旧逗子町区域の分離／592	
行政整理／593	
四 更生対策の新展開と財政再建	
― 第二次梅津市長の時代―……………	593
第二次梅津市政の課題／593	
更生対策の推進／593	
新構想の展開／594	
赤字財政の克服／594	
五 歴代の助役と収入役……………	595
歴代助役／595	
歴代収入役／595	
第二節 市議会の活動……………	595
一 新しい制度による市議会の発足……………	595
市議会の組織／595	
本会議、常任委員会などの活動／595	
市議会のその他の活動／597	

二 市議会議員と議長・副議長……………	597
第一期市議会議員／597	
第二期市議会議員／598	
歴代の市議会議員と副議長／598	
第三節 米海軍横須賀基地と横須賀市政……………	599
一 進駐軍による占領行政……………	599
占領行政の始まり／599	
旧軍用財産の処理／600	
二 基地と行政……………	600
第四節 市民の政治参加……………	601
一 選挙と市民の意思……………	601
二 請願、陳情と市民の意思……………	602
第四章 産業・経済の発展と市財政……………	603
第一節 農業の推移……………	603
一 戦後の農業問題……………	603
本市の概況／603	
農家数・農家人口の増加／604	
二 農村の変化……………	605
農業経営の変化／605	
農業行政の変化／606	
三 農地改革と農業委員会……………	606
農地改革／606	
農業委員会／606	
第二節 水産業の推移……………	608

一 軍港と漁業……………	608
二 沿岸漁業の変遷……………	608
沿岸漁業の再建／608	
漁家数、漁船数、漁獲高の現況／609	
三 漁業経営の移り変わり……………	610
浅海増殖事業／610	
ノリの養殖／611	
四 遠洋漁業基地横須賀……………	611
第三節 工業の発展……………	612
一 戦後一〇年間の工業……………	612
戦前の工業／612	
戦後の工業の推移／613	
転換工場の歩み／614	
二 工業地域の展望……………	615
工業地域の分布／615	
地域内の工業内容／616	
第四節 商業の発展……………	617
一 戦後における商業の動向……………	617
終戦直後の商業活動／617	
商業再建への道／619	
二 本市商業の特色……………	620
狭小な商業圏／620	
小規模な商業と依存経済／620	
三 本市商業地域の変遷……………	621
四 金融業の動き……………	622
戦前の金融事情／622	
戦後の金融事情／622	

	五 商業機関……………	623
	商工会議所／623	
	商業機関としての組合企業／624	
	第五節 産業別人口……………	624
	一 戦前戦後の人口の推移……………	624
	本市人口の特異点／624	
	人口の回復過程／625	
	二 産業別人口構成の推移……………	626
	戦前の産業別人口／626	
	戦後の産業別人口の変化／627	
	第六節 財政再建への推移……………	627
	一 戦前の財政需要の推移……………	627
	二 終戦直後の財政状況……………	630
	三 赤字財政と新財源の開拓……………	630
	赤字財政とその対策／630	
	自立財政への道／631	
	第七節 戦後の労働事情……………	632
	一 雇用問題……………	632
	戦後の雇用状況／632	
	進駐軍労務者と労働事情／633	
	失業対策事業／635	
	二 戦後の労働組合運動……………	635
	労働組合の動き／635	
	労働争議と賃金／635	
第五章 市民生活の発展……………		636

第一節 市街地の復興……………	636
一 終戦後の町界町名地番の整理……………	636
新しい都市づくり／636	
二 新しい市街地の形成……………	639
第二節 保健衛生と医療施設……………	640
一 保健衛生の進展……………	640
戦後の保健衛生措置／640	
保健所などの整備／641	
二 民間医療施設の充実……………	642
三 国民健康保険制度の発足……………	642
四 清掃業務の充実……………	643
し尿の処理／643	
海洋投棄／644	
ごみの処理／644	
第三節 市民を守る諸機関……………	644
一 警察……………	644
自治体警察／644	
警察法の改正／644	
二 消防……………	645
消防制度の変革／645	
自治体消防／646	
三 裁判所、検察庁……………	647
裁判所の変遷／647	
検察庁／647	
四 刑務所、少年院……………	648

横須賀刑務所 / 648 久里浜少年院 / 649

第四節 不足する住宅とその対策 649

一 戦後の住宅状況 649

軍都の特殊事情 / 649 一万戸以上の不足 / 649

二 住宅対策 650

公営住宅の建設 / 650 住宅公社の発足 / 651

第五節 水道事業の発展 652

一 戦前の水道事業 652

海軍水道とのかかわり / 652

二 給水能力の増強 652

増える上水需要 / 652

第六節 電気・ガス供給の推移 654

一 電気供給の変遷 654

戦前の供給 / 654 戦後の供給 / 655

二 ガス供給の変遷 655

戦前の供給 / 655 戦後の供給 / 656

第七節 社会福祉の充実 656

一 戦後の社会福祉行政 656

相づく立法上の改革 / 656

二 民間の社会福祉事業……………	657
戦前から進歩的な福祉事業／657	
三 社会福祉協議会……………	658
福祉活動の促進と連絡調整機関／658	
四 民生委員・児童委員の活動……………	659
恵まれない人への陰の力／659	
五 社会福祉行政の歩み……………	660
各種条例の整備／660	
福祉事務所／661	
第八節 道路及び交通機関の発達……………	662
一 本市の道路と交通……………	662
トンネルで結ばれる交通／662	
二 戦後の道路の発達……………	662
舗装化への努力／662	
三 戦後の交通運輸機関の推移……………	664
電車とバス／664	
貨物輸送／668	
第九節 市民生活の向上……………	668
一 戦後の市民生活……………	668
戦後の食糧事情／668	
好転する市民生活／669	
二 市民生活の向上……………	671

第六章 教育と文化の発展

第一節 新教育体制への発足

一 戦時教育の解体

四大指令の発令 / 673

厳しい指令の徹底 / 674

アメリカ教育使節団の来日 / 674

673

二 新教育の発足とその整備

新教育の基本線 / 675

六・三制の発足 / 676

新制高等学校の発足 / 678

675

私立学校の発展 / 678

第二節 新しい教育課程

一 新教育の内容

学習指導要領 / 680

新教科の登場 / 680

教師の再教育 / 681

680

学校給食の開始 / 681

二 新教育の展開

教育研究所 / 682

横須賀市学校教育目標の設定 / 683

基準教育課程の作成 / 684

682

P T A の発足 / 684

第三節 社会教育の充実

一 社会教育の進展と施設の充実

社会教育の活発化 / 686

社会教育施設の充実 / 687

社会体育の充実 / 688

686

二 基地問題と環境浄化の動き

689

第四節

市民文化の進展

基地周辺の風俗問題 / 689

混血児問題 / 690

環境浄化の動き / 690

691

一 市民文化の二つの流れ

文化研究団体の発足 / 691

横須賀文化協会 / 692

691

二 横須賀の観光資源

終戦後解放された観光資源 / 692

史跡と横須賀十景 / 693

692

第五節

文学にあらわれた横須賀

堀田善衛 / 695

金達寿 / 695

茶木滋 / 696

獅子文六 / 696

吉川英治 / 697

695

司馬遼太郎 / 697

阿川弘之 / 698

なだ・いなだ / 698